

映画

キズついた
子どもたちが
くれる「希望」

下平真弓

しもたい まゆみ/ライター



©アジアプレス・インターナショナル

『ぼくたちは見た ガザ・
サムニ家の子どもたち』

二〇〇八年末に始まった、イスラエル軍の対ガザ地区空爆は、約三週間で一四〇〇人の死者を出したといわれている。これにより二九人の家族や親族を失った「サムニ家」の子どもたちの叫びが詰まった作品だ。

冒頭に出てくる攻撃直後の情景を前に、私は怯んだ。いまだ出口が見えない中東問題の難しさを思い出したのだ。しかし、それはあくまでも一瞬だった。軽々しく希望を抱くことなど、到底できない。でも、子どもたちの懸命に生きる姿や言葉を追っていくうちに、「可能性」と「希望」を期待できるような気がしてきたのだ。

親や兄弟を目の前で殺され、少年は攻撃的になり、少女は「彼らと同じことをしたい」と憎しみを露にした。しかし約半年後の彼らは同じではなかった。少女は、「深い信仰で抵抗すること。それは武器よりも強いのだ」と言い、少年は破壊されて砂漠化していた畑に、オリーブの苗を植えるのだった。

去る五月二十八日には、エジプトがガザ

地区との国境を四年ぶりに開放し、完全封鎖が解かれた。物資の搬入など多々制限はあるものの、大きな変化だ。出口は見えなくとも、何かが刻一刻と変わっている。変わる可能性があるのだ。子どもたちの真っ直ぐな心が、光となって前途を照らすのを感じた。

ただし、その子どもたちは今もイスラエル軍の攻撃の可能性に怯えている。再び「後退」の可能性も小さくはない。日本は今、「震災」や「原発事故」という非常事態下にあるが、日常的に非常事態下に置かれている人々がいる。窮地に面した今だからこそ、そんな人々の苦しみや悲しみに寄り添いやすいこともある。パレスチナを近くに感じる好機かもしれない。

監督・撮影：古居みづえ
2011年/日本/86分
●8月6日(土)より、東京・ユーススペース(TEL03-3461-0211)にてモーニングショー。今秋、大阪・第七藝術劇場(TEL06-6302-2073)にて。ほか全国順次公開。

週刊金曜日 2011.8.19 (859号)